

ネンっていったい何でんネン



What's in a name?

しょうじ ひろし 庄司 博史 民博 名誉教授

アメリカ映画についてたいして素養はないが、映画のあと出演者やスタッフなど名が延々と続くクレジットを眺めるのが好きだ。そこにはアメリカらしくじつにいろいろな国由来の人名が目まぐるしくあらわれ、知識を総動員して出身国を想像する楽しみはちよつとした中毒にもなる。ローマ字書きの日本人の名は、NOBORU TANAKAのように、単純な子音母音のくりかえしで冗長ではあるが結構目立ち、「おやこんなどこでも日本人が活躍しているぞ」とうれしくもなる。

なかでもおもしろいのは一目で出自国や民族がわかる名が多いことだ。たとえば「Jヤン」ならば、ウィリアム・サローヤン（作家）のようにアルメニア人かその子孫であることがすぐわかるし、「Jジッチ」がついていれば十中八九、ボスニアセルビアなど旧ユーゴスラビア出身者だ。その他、どこそこ出身のという意味で、ド・ゴールのように「ド」ならフランス、ヴァン・ゴッホのように「ヴァン」ならオランダをルーツにもつ名であることもよく知られている。

さて、御存じのかたにはお待たせしましたが、フィンランドにもフィンランド人特有の名前がある。最後の部分にネン（NEN）のついた名字である。日本で知られている名としては、ミカ・ハッキネン（F1ドライバー）、ヤリ・リトマネン（サッカー選手）のほか、二代前の女性大統領タルヤ・ハロネンもそうである。フィンランド出身ながら日本国籍を取得して参議院議員を務めた弦念丸皇（ツルネン・マルテイ）さんも本

名はトウルネンである。

日本のお笑い番組でアホカイネン、パーヤネン（双方とも人名として実在します）が取り上げられて一気に知れ渡ってしまった「ネン」であるが、確かにフィンランドではネンさんは多い。人名の種類では五パーセントあまりなのだがネンさんの人口に占める割合は四割近いともいわれ、それだけネンさんにはよくぶち当たる。

さぞかしネンはフィンランド古来の伝統的な名と思われそうだがそうではない。かつて移動農民が多かったフィンランド東部では氏名^{しな}Ⅱ姓が個人の所屬を示していたが、西部では農家の屋号が個人の同定に用いられ、移動の度に屋号は変わっても姓をもたない人びとは、一九世紀に入っても少なくなかった。近代化を進めていた当時の政府にとってこれは由々しき問題で、なかば強制的に姓をもつことが勧められた。その際手軽なモデルとなったのが東部で一部の姓にあったネンで、西部ではこれを姓の標^{しるし}として「丘」「山」「川」などありふれた語につけて間に合わせたらしい。そもそもネンは形容詞を作ったり、親しみを込めて小さいものをよぶ際に用いられた語尾で姓に限られた要素ではなかったが、とにかくネンさんたちは爆発的に増えていった。二〇世紀初頭まで続いた姓作りのなかでネンの流行は比較的短命におわり、その後ネンなしにもどっていったらしい。とはいえ、地縁も血縁もない人びとのあいだに大量にうみだされた同姓のネンさんたちは、今日フィンランドのシンボルであることは確かだ。